

第 147 号 (2012)

〒733-0032 広島市西区東観音 8-10

ワールド・フレンドシップ・センター

理事長：山根美智子 館長：ラリー&ジョアン・シムズ

TEL (082) 503-3191

FAX (082) 503-3179

E-Mail: worldfriendshipcenter@nifty.com

URL: <http://www.wfchiroshima.net/>



初めてのピースキャンプ

広島女学院中学校 3 年生 高矢 麗瑚



私は今回初めてピースキャンプに参加しました。最初は少しおっかなびっくり…と同時にワクワクもしていました。日本に住む外国人には何度も会ったことはありましたが、日本語の話せない外国人には一度も会ったことがなかったからです。

意思疎通ができないと争いごとが起こるけれど、意思疎通ができれば友達になれる、私はこのことをピースキャンプから学びました。多くの人が他国についての偏見を持っています。私はこういう偏見を持つ気持ちを無くしてほしいと思います。もし誰かが良くない事を言ったとしたら、私はピースキャンプの事を話します。そして、そういう偏見を取り払ってもらおうようにします。

私は皆よりも一足早く帰らなくてはなりませんでしたが、帰りたくありませんでした。私の人生の中で最高に幸せな時間だったからです。また皆さんに会いたいです。親切にしてくださいとうもありがとうございました！！ たくさん、たくさん助けられました。とても嬉しかったです。

ピースキャンプの感想

広島市立牛田小学校 6 年生 坂田惟仁



私は今回初めて参加しました。小学6年生です。私は、お姉ちゃんたちが何回か参加していて、楽しそうだったので参加したいと思っていました。今年は広島で開催されるのと、悠綺お姉ちゃんがカウンセラーをするので参加することができました。

私は最初、英語でのコミュニケーションができるかとても心配でした。日本の小学校では6年生から週1回英語の授業がありますが、まだまだ挨拶程度です。学校以外で英語を習っていましたが、会話をするまでいっていません。通訳してもらったり、ゆっくり話してもらったり、動作をつけてもらいました。

そして、何日かキャンプをしていると少しずつ相手の言っていることが分かってきました。とても近い国なのに文化や、風習など日本と違うことがたくさんありました。でも、単語や、遊びで似てるなーと思うところもありました。

長いかなと思っていたピースキャンプもあっという間に過ぎてしまいました。来年は中学生になるので、自分で伝えたり聴いたりできるように英語をしっかり勉強してまた参加したいと思います。

「8ヶ国・地域からの参加者 50 人が広島で平和研修と心あたたまる交流」

WFC 理事 藤井 正一



記念写真(アステールプラザにて 2012年8月)

東北アジアの市民団体が協働して実施している人材育成プロジェクト「NARPI」(Northeast Asia Regional Peacebuilding Institute / 北東アジア平和構築インスティテュート / ナルピ)は日本、朝鮮半島、台湾、中国、モンゴル、極東ロシアの NGO が中心となって企画・運営しています。事務局はソウルの韓国平和構築インスティテュートが担い、日本ではワールド・フレンドシップ・センター(広島)、非暴力平和隊などが連携しています。第1回平和構築研修会は2011年8月14日から28日の約2週間、韓国(ソウルとDMZ)で開催され、参加者は13カ国から約60名でした。

運営委員会で2012年は、原爆投下で壊滅し、67年後見事に復興し、国際文化都市として発展している広島で開催することが決定されました。広島開催には幾つかの課題がありました。期間が2週間で、参加者が確定していないので、広島市の公共施設(島の島自然の家、アステールプラザなど)を予約すること、ボランティア活動者の募集、寄付金集めなどは困難でした。

しかし、幸運にも(財)広島YMCA桑田隆明理事長と上久保昭二総主事が全面的な協力を申し入れてくださり、前半の1週間をアステールプラザで後半の1週間を広島YMCA水内研修所(広島市湯来町)で開催できることになりました。

平和構築のための広島研修会は2か所での開催となり、第1週(8月12日～16日、アステールプラザ)は「対立と平和の理論」、「トラウマ・ヒーリング」、「地域に根差した学校のための修復的正

義」について研修し、フィールドトリップ(8月17日、広島平和公園と被爆者証言を含めての原爆資料館見学)では、笠岡貞江さんの原爆体験の証言と核兵器廃絶の世界平和の訴えに心打たれました。8月18日、大久野島では日本軍の毒ガス製造工場跡を見学し、山内先生の講演をお聞きしました。現地研修は見聞により、実態把握と講演を聞いて、強い感動を受けました。第2週(8月20日～24日、広島湯来YMCA)は、「歴史/文化の平和の語り」、「平和教育の理論と実践」、「平和構築のスキルトレーニング」についての研修でした。

夜の会合の一つとして、ワールド・フレンドシップ・センターを訪問し、シムズ館長夫妻からバーバラ・レイノルズさんの生涯をかけた平和貢献活動とWFCの40年間の活動に理解を深めました。

参加者からの評価として、心温かい広島の人たちとの交流、講師にも恵まれ、多国籍の参加者同士の交流などもあり、広島平和研修会は期待以上の成果をあげることができました。課題として挙げられるのは、日本は円高で物価が高いので、東アジアからの参加者には大きな負担であったこと、広島からの参加者が皆無であったことでした。



(WFC 訪問 2012年8月)

正義の回復とは？

WFC 館長 ジョアン シムズ



(中央:高さん、WFCにて他の参加者たちと)

高 貞元さんは帰宅してすぐに彼の妻と母、そして息子までもが、さしたる抵抗の跡もないのに死んでいるのを発見しました。ひどい暴力で、最愛の人たちを殺された人間は、どのように生き続けることができるのでしょうか？

2012年8月24日の夜 ワールド フレンドシップ センターで高 貞元さんはおよそ15人の人たちを前にして語り始めました。高さんは韓国出身で NARPI(北東アジア平和構築研究所)の人々とともに広島を訪れました。彼の体験は心を動かされずにはいられないものだったので、NAPRI の参加者のみならず WFC も彼の体験を分かち合いたいと彼を招きました。

高さんは、このような酷いことをした人に対しては誰であれ怒りの気持ちを持ち続けていました。その殺害者がもともとは近所の人が悪事を働いたのでその人を殺そうと思っていたのだということがわかって彼の怒りはより増幅されました。近所の人ドアが鍵をかけられていたので高さんの家に押し入り、とにかく人を殺すという、その日に殺害者が感じていた感情のために目の前にいた人々を殺したということであったのです。

彼は何度も自殺を試みました。彼の生き残った娘は、カトリックの教会で悲しみを癒す集まりに参加することを勧めました。彼が理解してくれる友達を見つけ、神の彼への愛を学んだのは教会においてでした。間もなく高さんの怒りの感情は、最初は自分自身への深い心の痛みと悲しみの感

情へと変わり、次にはその気持ちは殺害者へと向けられました。

高さんの家族の殺害者が見つかり、裁判にかけられると、高さんは彼に会いに行きました。高さんは殺害者に、自分の多くの家族の命を奪われた悲しみを語りました。次に高さんは彼の眼をじっと見つめあのように悲惨な罪を犯してしまった殺害者に対する高さんの深い悲しみを述べました。高さんは殺害者に、あなたのために祈りますと告げました。そして殺害者が神の愛と赦しを得られるように願っていると述べたのです。

高さんは今は家族の悲劇からの再生を得た彼の体験を分かち合っています。彼の体験はドキュメンタリーフィルムになりました。現在彼は受刑者に生活を再建し、受刑者が持っていた怒りと憎しみの感情を、自分自身への赦しと神への愛の気持ちに置き換えられるよう手助けをしています。彼はまた NARPI のようなグループと自分の体験を分かち合っ、赦し力を平和の構築に役立てることができるようにと願っています。

ユースピースフォーラム

WFC 館長 ラリー・シムズ

広島で平和記念式典が開催された 8 月 6 日ごろに開催されたイベントの中に YMCA スポンサーによるこのユースピースフォーラムがありました。そこで、世界中から参加した若者達が自分たちの国での平和活動について話し合い、フォーラムの終盤、生徒たちにグループで広島の団体のピースリーダーたちと話し合う場が設けられました。WFC はそのリーダーたちの一員として参加の依頼を受けたのです。（右から 3 人目：クリフトン・トルーマン・ダニエル氏）



その夜のハイライトはクリフトン・トルーマン・ダニエルとアリ・ビーザーの紹介でした。ダニエル氏は 1945 年 8 月、世界ではじめての原子爆弾の使用許可を与えたアメリカ大統領、ハリー・トルーマンの孫であり、ビーザー氏は広島、長崎への原爆投下の際に使用された両機の B29 に搭乗していたジェイコブ・ビーザー氏の孫です。両氏は原爆 67 周忌を追悼するために日本を訪れていました。NPO Sadako Legacy の招待で来日したのです。貞子の実兄である NPO Sadako Legacy 代表とダニエル氏はこの数年にわたって交流を深め、この度の両氏の招待に至りました。両氏は

「目標は、核兵器が二度と使われないように被爆者の体験を広める手伝いをすることです。」と述べました。

WFC 代表は両氏のプレゼンテーションの後、短時間ではあったが彼らと言葉を交わすことができました。この夜の集まりに出席したフォーラムの参加者たちに、世界には WFC のように平和のために活動している団体が数多くあることを母国に帰って伝えて欲しいと思います。また、世界各地にあらゆる年齢層のピースメーカーたちがいることを知ってもらうのにお役に立てたと思います。WFC は世界の人々が被爆証言にアクセスできるよう引き続き努力していきたいと強く思います。



(後列右から2人目:ジェイコブ・ビーザー氏)

修道大学からのインターン生について

WFC 館長 ジョアン シムズ

美季さんも勇次君も、最初にラリーと私に会ったときは少しはにかみやに見えました。彼らの担当のジム・ロナルド(WFCの理事の1人でもある)も同席していました。インターンシップの目標やWFCの目指すものを双方で分かり合った頃には、美季さんも勇次君もすっかり気おくれた感じは無くなって、これから始まる WFC での2週間に目を輝かせていました。

WFC で行われた8月6日の行事や、その夕方の灯籠流しで、2人は WFC



(前列:勇次君、美季さん)

の多くの人たちに出会うことができました。2人のインターンシップの正式期間は、9月1日から9月14日まででした。

WFC でのインターンシップとは、次のことを学ぶことです。つまり客室のベッドメイキングと朝食準備のやり方、英会話クラスの運営、宿泊予約の取り方、予算管理、また、NPO が我々の事務所管理人や簿記係りからどのような影響を受けているか、などを学んだり、また WFC の平和活動に参加したりもします。美季さんと勇次君はまた、バーバラレイノルズの書いた“The Phoenix And The Dove”も読み WFC を完全に理解しようとしていました。今年、ラリーと私は、インターンたちが WFC でできる仕事の一覧表を作りました。勇次君は CD、ビデオ、DVD を整理してその一覧表を英語と日本語で作る仕事を選びました。また宿泊客が、見ながら折れるように、折り鶴のサンプルも用意しました。美季さんは日本語図書に英語で表題をつけるのを選びました。また彼女は角のレストランの英語メニューをもっと詳しく書きました。

美季さんと勇次君は期間中1日だけ宿泊客を体験するために WFC に泊まりました。彼らは英語を毎日しゃべることにとっても熱心でした。ある日には、すべてのことを彼らだけが責任をもって行いました。

10月25日には修道大学で、我々インターンシップ委員は、他の多くのインターンたちと集いました。多くの学生たちはそれぞれのインターン体験を発表しお互いに聞きあいました。私たちは美季さんと勇次君による、WFC での体験のパワーポイントを使った発表を英語と日本語の両方で聞きました。発表がすべて終わって、立食会がありました。最初の出会ってから修道大学での夕方のブレゼンでのお別れまで、大成功に終わりました。

広島経済大学によるインターンシップ

WFC 館長 ラリー・シムズ

WFC がマイク・スターン氏を招いてのワン・ワールド・ピース・コンサートを企画して以来、広島経済大学の学生たちは、WFC と共同で行うこの企画に、たいへん興味を持ってくれました。そして、4月には広島経済大学にて、マイク・スターン氏の「ミニコンサート」を開催することができました。同イベントでは、広島経済大学の「広げよう!!平和折り鶴プロジェクト」のメンバーが、日頃行っている社会貢献活動の紹介をしました。この日の活動を通し、学生たちの関心の高さが明らかに見とれました。その後、この夏に WFC が主催した、「2012東北アジア青年ピースキャンプ」に協力してくれた広島経済大学の学生たちから、9月から WFC でインターンシップを受け入れてくれないかとい

う、依頼がきたのです。学生たちからのこの依頼は、素晴らしいことでした。なんと、学生たちは、大学側からインターンシップをするように言われたのではなく、大学の単位とも関係なく、自分たちの時間を割いて活動しようとしていたのです！

広島経済大学の「広げよう!!平和折り鶴プロジェクト」のメンバー六名が、それぞれの授業、アルバイト、旅行の計画などのスケジュールをやり繰りしながら、WFC でのインターンシップに参加しました。WFC の規模とニーズに合わせて、メンバーは二期のグループに分かれて活動しました。活動は日程を調整しつつ、一期は9月17日から21日、二期は9月22日から30日としました。

広島経済大学の学生たちには、過去に広島修道大学の学生たちが参加してきた、基本のインターンシップ・プログラムに参加してもらいました。(広島修道大学のインターンシップ活動の詳細につきましては、このニュースレターに記事を掲載していますので、ご覧ください。)

学生たちにインターンシップの場を提供することは、学生だけではなく、WFC にとっても有益なことです。学生は非営利団体への理解を深め、小規模な団体の運営方法を学び、帰ってゆくのです。平和団体の活動について話す学生たちの会話に、さらにWFC での体験談が加わって話題は膨んでゆき、WFC の活動がより多くの人々の耳に入ることとなるのです。インターンシップの期間中、学生たちは、なかなか手つかずとなっていた、WFC の庭木の剪定といった仕事も手助けしてくれました。また、フロイド・シュモア記念資料館のオープニングのために広島にお越しいただいたゲストのために、折り鶴のレイまで準備してくれました。

WFC は、アメリカやイギリスなどの海外の大学へのインターンシップの機会を拡大していきたいと考えています。WFC インターンシップ・プログラムにご協力いただける大学に関する、ご意見がございましたら、WFC 館長までお知らせください。



(左から右へ: ジョアン、池内裕登、伊東卓矢、河野晃伸)

広島平和記念資料館シュモーターハウス

シュモーターさんの「ヒロシマの家」を語りつぐ会代表 今田 洋子



「ジュノーさんは医薬品を送ってくれた人で知っているけど、シュモーターさんで何をした人？」……平和に関心のある人でもほとんどの人がそう聞きます。江波にある地元の人がシュモーター会館と名付け集会所として親しまれている建物には、「被爆者のために家を建て、市に寄贈……」と説明文がつけられていました。私たちもその程度で納得していましたが、シアトルピースパークのサダコ像の片腕修復のための1ドル募金をきっかけに、更にシュモーターさんの生き方を知りたいと思

うようになりました。そして市役所、区役所を訪ね、東京、兵庫、神奈川、長崎と人々を訪ね、調べ歩きました。

「1949年8月、原爆投下の罪を償おうと全米から4000ドルを携え、まだ焼跡の残る広島を4人が訪れる。東京や広島のボランティアと一緒に1953年までに住宅と集会所21軒を建て、市と民間に寄贈した。」ことがわかりました。その集会所が広島平和記念資料館の分館として南東に40mばかり移転し、シュモーターハウスとして11月1日開館しました。10月31日開館式が行われました。63年前のシュモーターさんの再来かと思うほどよく似ておられる御子息のシュモーターさん、アンドリュースさん達が高齢にもかかわらず来広して下さいました。エピソードをまじえ、ヒロシマの家の建設当時の事、平和主義の生き方を話して下さいました。

日本には60年ひとめぐり、還暦の考え方があります。62年被爆者の家・地域の集会所として生き、これからは広島に寄せられた海外からのさまざまな支援を伝える資料館として再生します。ヒロシマは忘れてはならない人々を語りついで、将来を生きる子供たちに伝えていきたいと思います。

シュモーターハウスプロジェクト（2011年12月～2012年11月）

WFC 館長 ジョアン・シムズ

シュモータープロジェクトはあらゆる点で成功しました。事の始まりは2011年12月に広島市からラリー

と私にシュモーター記念資料館の開館式にシアトルを代表して出席するようにとの要請があったことで、そこから資料館のオープニングをはさんだ歴史的な1週間(2012年10月27日～11月4日)へと発展したのです。このプロジェクトの成功はひとえにWFCの理事会全体、英会話クラスの生徒さんたちそしてピースクワイアの助力の賜でした。特に感動したのは1軒だけ残ったシュモーターハウスを保存する運動を長年続けてきた今田洋子さんをラリーと私に紹介してくれた車地かほりさんです。かほりさんは、今田洋子さんや広島市と共にプロジェクトを立案し実現するために我々のお手伝いをしてくださいました。

フロイド・シュモーターさんの子息ウイルフレッド・シュモーターさんとフロイドの孫息子さんや孫娘さんがエミリー・アンドリュースの子息ブルックス・アンドリュースさんと共に開館式及びその週の様々なイベントに参加しました。フロイドとエミリーは2人とも日本政府から1949年から1953年にかけてヒロシマに家を建てた功績により勲4等瑞宝章を授与されました。

アメリカからの出席者としてヨッシュ・ナカガワさんと妻のスーさん、ハーブ・ツチヤさん、ブルックス・アンドリュースさんと妻のコリーンさん、ジョイス・イーさんがいました。また他にアメリカからフレッド・ハセガワさん(被爆者)と妻のくみさん、ミッチ・ホンマさんと妻のステファニー・ストーンさんが出席しました。ミッチさんはフレッド・ハセガワさんの甥です。

ヨッシュ・ナカガワさんの友人として風間治雄さん(神戸より)とアメリカのビジネスマン、トミオ・モリグチさんが出席しました。モリグチさんは商用で東京に来ていて、多くのイベントに出席しました。安積夫妻は東京から出席しました。安積仰也さんはフロイド・シュモーターやエミリー・アンドリュースと共に二夏家の建築に携わりました。

10月27日から11月4日にわたる10日間は広島に於いて歴史的な様々な活動で埋め尽くされていきました。多数のテレビや新聞の記者達がそれぞれのイベントで参加者にインタビューし報道しました。その週はウイルフレッドさんによって語られたフロイド・シュモーターの話、ブルックスさんによって語られたエミリー・アンドリュースの話そして浜井道子さん、ヨッシュ・ナカガワさん、ハーブ・ツチヤさんによって語られた日系米人強制収容所の話に焦点が当てられました。

その1週間は「日系米人強制収容所シンポジウム」と銘打ったWFC主催のシンポジウムで始まり、室は満員で立っている人達もいました。次は、10月31日に江波で催されたシュモーターミュージアムの公の開館式典でした。およそ80人の人達が参加しました。ミュージアムの展示は外国から来て広島再建の手助けをした人々を特集しています。午後には慰霊碑への献花が行われました。歓迎会が平和公園内の国際会議場地下のレストランセレーナで開かれました。アメリカからのゲストがシュモーターミュージアムに贈り物をしました。アンドリュース家からエミリーの日記や写真を収めたスクラップブックが贈られました。シュモーター家からは、勲4等瑞宝章のメダルを身に着けたフロイド・シュモーターの油絵が贈られました。メダルもミュージアムに寄贈されました。ヨッシュ・ナカガ

ワさんは、日系バプティスト教会やシアトル市からの 2000ドルをミュージアムに寄付しました。

11月1日に松井市長は、1時から1時30分までゲスト達に面会しました。市長は1949年から1953年に広島に家を建設するプロジェクトのもたらした功献と平和の心に対して感謝の気持ちを表しました。

その日の夕方、広島市民のための講座が原爆資料館地下のメモリアルホールで開かれ87人の出席者がありました。市からシュモーフハウスに関する詳細な話やシュモーフハウスを保存してミュージアムにすることになった経緯が報告されました。シュモーフハウス建造に関する詳細がシュモーフとアンドリュースの息子さん達から報告されました。

11月2日には女学院大学で若者のための講演会が開かれシュモーフやアンドリュースに関する詳しい話がされました。ハーブ・ツチャさんは日系アメリカ人の強制収容について話し、近藤紘子さんは被爆体験とシュモーフやアンドリュースとの関係について話しました。講演が始まる前に女学院大学の学長からゲストに対して歓迎の言葉がありました。この講演会には約35人の参加者がありました。

素晴らしい送別会がゲスト全員のためにWFCで開かれました。ゲストの方々は合計で約13万6000円WFCに寄付して下さいました。今田洋子さんは、ワシントン大学近くのシアトル平和公園にあるサダコ像の修復のために、歓迎会で集めたお金をシアトルのゲストに寄付しました。この驚くほど成功した週は、広島と米国の上に新しい絆をつくり多くの広島の住人に平和と希望の力を復活させ再び燃え上がらせました。このプロジェクトは、WFCやシュモーフミュージアムそれに関連した日系米人強制収容の物語そして広島市にとって大成功でした。



(松井市長表敬訪問)

Mary Blocher Smeltzer さんとの思い出

WFC 理事 木戸マサコ

メアリー・ブロッカー・シュメルツァーさんは、1981年から1982年にワールド・フレンドシップ・センターの館長として勤めました。彼女は大変なエネルギーの持ち主で、賢い助言者であり、しかも鋭い機知に富んでいました。また自然、色彩、そして音楽を愛しました。1981年の秋、初めて小柄でショートヘアのバーバリー・コートを着たメアリーさんに会ったのは宇品行の電車の中でした。私はちょうどその時翠町のワールド・フレンドシップ・センターに行く途中で、彼女もまた広島に着いたばかりでセンターへ行くところでした。これが31年間、彼女が広島を去ってからも続いた友情の始まりでした。



(Mary Blocher Smeltzer

1915-2012)

幸いにも私はカリフォルニアのラ・ヴァーンのお宅を訪問する機会があり、そこで多くのことを学びました。とりわけ彼

女が水をととても大切に扱っていたことです。水資源の豊富な日本に育った私は、彼女が水道水を細い箸の先のようにして使っていたのを見て驚きました。訊ねると彼女はボツワナ共和国で生活したことがあって、水の有難さを身にしみて感じているからだと教えてくれました。また、彼女は素晴らしい読書家で、毎晩寝る前に必ず本を読んでいた。親日家の彼女は日本食が大好きで私が彼女の家を訪ねる時、ラ・ヴァーンでは丼茶碗が手に入らないので持ってきてほしいと私に頼みました。そして広島からの丼茶碗を手渡すと大喜びでした。

長女 Marty からの訃報に同封されていた死亡者略歴によるとメアリーさんとご主人のラルフさんは彼らの生涯をパブリック・サービスに、プレズレン教会に、そして平和と社会正義のための証人として捧げました。1942年にロスアンゼルスでの教職を辞め Manzanar の日本人強制収容所で教えました。収容所での状態があまりにもひどいのでプレズレン教会からの支援を得てシカゴで日本人のための移転宿泊所を立ち上げました。1943年から1944年に、彼らは約1000人の日系米人を中西部で再定住するのに援助しました。それから、同じような宿泊所をニューヨークのブルックリンにも立ち上げました。この間に、日本文化に対する終生変わらぬ愛がメアリーに芽生えてきたのです。

2012年10月8日、3人の子供たちと他の家族たちに見守られて、希望通り自分の家で96歳の最期を迎えたのでした。良かったね。メアリー。お休みなさい。

2013 年 3 月の 韓国平和使節派遣にあたって

WFC 理事 田口 知鶴子

2003 年に始まった広島・長崎と韓国の平和使節交換(PAX)は、年々深まり、これまでに約 20 人がお互いの国を訪問し合い、親密な友好関係を築き上げて来た。自国内では知り得ない相手国の歴史や直面する平和を脅かす問題など、身体を通して学ぶことができたし、ホームステイでは儒教的心情や習慣・食文化に共通点が意外に多いことに驚嘆した。

他方、竹島・慰安婦問題では、政府間で長年解決が試みられて来たにもかかわらず、韓国内で今日でも憤りが噴出している。かつての日本の犯した罪の重さをしみじみ思う。人類が共存していく道はひとりひとりが自覚し、自国の歩む方向を見定め、過ちを厳しく監視しながら困難を乗り越えて共に努力する以外にない。

PAX は国際理解と友情を育むまたとない機会である。この度の平和使節も実り多い交流になることを期待して止まない。